

Y08a 東京女子高等師範学校に設置された水路部分室の勤務体制

馬場幸栄（一橋大学）

第二次世界大戦が激化の一途をたどる昭和19年、パイロットが天体の高度方位から基地の位置を容易に特定できるようにと水路部は『高度方位暦』の刊行を始めた。だが電子計算機がなかった当時、その刊行に無くてはならない暦計算の作業量はあまりに膨大で、水路部の人員だけでは到底それをこなすことができなかった。そこで水路部は複数の女学校に「水路部分室」を設置し、女子挺身隊として動員された女学生たちを暦計算作業に従事させた。東京女子高等師範学校（現・お茶の水女子大学）もまた水路部分室が設置された女学校のひとつで、同校の女学生ら五十余名が昭和19年10月から終戦まで暦計算作業に従事した。水路部分室における暦計算作業は軍事機密であったためその詳細に関する記録は現存しないが、お茶の水女子大学には東京女子高等師範学校が記した『海軍水路部（於学校）日誌（一）』および『水路部（於学校）日誌（二）』が伝えられている。これらの日誌には塚本裕四郎技師（当時の水路部第四課長）をはじめとする水路部の技師・技手らの名前が出てくるほか、同校の女学生らの勤務状況も記録されており、水路部分室の勤務体制をある程度窺い知ることができる。本発表では、これらの日誌から読み取れる水路部分室における女学生への指導・監督体制、女学生の組織編制、勤務時間割、他校の指導員としての女学生の派遣、空襲時の対応などについて報告する。